

修士論文（要旨）

2025 年 1 月

応答表出の捉えにくい重症心身障害者への継続的支援を動機づける要因の検討
——生涯学習に取り組む元教師を対象に——

指導 久保 義郎 教授

国際学術研究科
国際学術専攻
心理学実践研究学位プログラム
ポジティブ心理分野
223 J 2065
波多野 裕子

Master's Thesis (Abstract)
January 2025

What is the factor that former teachers continue supports people with
profound multiple disabilities and difficulties of expression?

Yuko HATANO
223J2065
Master of Arts Program in Positive Psychology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Yoshio KUBO

目次

第1章 序論	1
1.1 重症心身障害児者に関わる支援に関する先行研究	1
(1) 重症心身障害児者のコミュニケーション分類	1
(2) 重症児者の支援に関する全般的先行研究	3
(3) 重症者の支援に関する先行研究—学校教師への調査	3
(4) 重症者の支援に関する先行研究—福祉施設職員対象	4
1.2 重症児者の現状と課題	4
(1) 重症者の学校卒業後の生活環境	4
(2) 障害像とコミュニケーション	4
(3) 重症者にとっての生活の質と意思決定支援	5
1.3 重症者の生涯学習支援を担う元教師	6
(1) 重症者の生涯学習支援の取り組み	6
(2) 退職後のボランティア活動に関わる先行研究と本活動の特徴	6
(3) 重症者の生涯学習に関する文部科学省の実態調査報告	6
(4) 応答性の乏しい重症者との相互交流	7
1.4 研究の目的	8
第2章 研究1 元教師への半構造化インタビュー調査	10
2.1 目的	10
2.2 方法	10
(1) 対象者と手続き	10
(2) 実施方法	10
①方法：質的テキストデータのカテゴリー分類と構造図	10
②方法：テキストマイニングを用いた関わりに関する語の分析	10
③方法：複線経路・等至性モデルによる径路の分析	11
2.3 倫理的配慮	11
2.4 結果	11
(1) インタビュー対象者の概要	11
(2) 質的データ分析による構造図の作成	15
①5つのカテゴリーと構造図	15
.....	21
② 応答性の捉えにくい重症者とのやりとりにおける心的対処過程	22
(3) 関わりにおける心理的側面の対応分析—計量テキスト分析	25
(4) 元教員らが学習支援員を継続する径路（TEM 図）	31
2.5 考察	35
第3章 研究2 全国の学習支援員（元教員）への Web 調査	37
3.1 目的	37
3.2 方法	37
(1) 対象者と手続き	37

(2) 分析方法	37
(3) 調査票の内容	37
3. 3 倫理的配慮	39
3. 4 結果	39
(1) 対象者の概要—基本情報項目から	39
(2) 独自の質問項目への回答結果	43
(3) 既存の尺度による分析	49
(4) 自由記述欄の分析	53
3. 5 考察	56
(1) 質問項目結果等	56
(2) 生きがい意識尺度	56
(3) 自尊感情尺度	57
(4) 自由記述	57
第4章 総合考察	61
1. 本研究で明らかになったこと	61
(1) 関わり続けている動機づけ要因	61
(2) 活動の選択と継続における役割変化	62
①学習支援員を選択して継続する径路と生涯発達	62
②ポスト中年期における自尊感情と活動継続	62
(3) 応答表出の捉えにくい重症者との関わりにおける心理的資源	63
①コミュニケーション困難感とネガティブ情動	63
②ポジティブな信念の所在	64
③曖昧さの中で保留する心的態度	67
(4) 対象者に対する考察	67
2. 本研究の意義	68
3. 本研究の限界と今後の課題	69

第1章 序論

重症心身障害児者（以下、重症児、重症者と略す）とは、重度の知的障害及び重度の肢体不自由が重複している児童（者）と規定され、大島分類（大島，1971）がよく使用される。しかし昨今では医療技術の進歩により病態によっては「超重症児」とする障害概念もある（山田，2005）。脳機能障害による分類（大村，2002）によれば、昏睡状態から何等かの手段でやりとりが成立する水準まで4つの分類を示している。全般に、自分の意思や感情を周囲に明確に表現することが困難であるとされる。日常生活においては、介護ケアが優先の受け身の状況になりやすく、また、支援者として関わる際にはその応答表出の読み取りに困難感が生じ、長期的に関わりを継続することは難しいとされる（宮地，2020）。しかも学齢を超えた成人期の重症者は、在宅生活の時間が増え外出機会も減るため、他者と関わる機会が激減することとなる。教育・療育分野の先行研究において「長期間の日常的関わりが重症者の発達を促す可能性」（松田，2002；宮地，2020）と示されているが、支援する者に関する研究は少なく、その中には、支援者の抱えるわからなさ、曖昧さへの不安、そして意思の汲み取りに対する不確実性に対する困難感の報告が多い。（山下，2020）一方で、教師を退職後に自ら選択し、重症者の家庭を訪問して生涯学習の授業を行い、関わりを長期に続けている少数の元教師らが各地にいる。ボランティアな活動であるが、重症者本人や家族のニーズに応え、継続した教育的支援の関係が築かれている。こうした支援者の心理的側面に着目し、応答性の捉えにくい重症者へ長期に関わっていることの動機づけや心理的資源を明らかにすることを目的とし、面接と調査研究を行う。なお、本研究は重症者の在宅生活の QOL の向上と共生社会の実現に貢献できるものと考えられる。

第2章 研究1：元教師への半構造化インタビュー調査

2.1 目的

重症者の生涯学習に関わっている元教員らにインタビューを行い、継続動機や関わり時の心理について聞き取り、承諾を得て逐語録をテキストデータにする。客観性を維持しながら、分析を通して全体の構造図を生成し、対象者を正確に理解する。

2.2 方法

重度障害者・生涯学習ネットワーク NPO 団体から 10 年以上の教師経験があり退職後の支援を行う元教師の紹介を依頼し、8 名の協力を得た。60 分程度の半構造化インタビューを行い、テキストデータを3つの方法で分析を行った。①文のまとまりごとにコーディングし、カテゴリー分類により抽象度を高めて全体の構造を図示化する、②テキストマイニング (KH Coder) を使用し抽出語の形態素解析を通し、語の関連の分析を行う、③TEM理論を用いて時間軸の視点から活動の継続を俯瞰し社会文化的に理解する。

2.3 結果

協力を得られた元教師らは長期に重症児者と関わり現在も訪問支援を通して積極的に活動されていた。質的データの分類により、13 のサブカテゴリーから最終的に5つの概念カテゴリーを生成し全体の構造図を作成した。また、活動の中核であると考えられる重症者との関わりに関する回答に着目し、KH Coder を使用して抽出語の関連や共起性、クラスター分析を行い全般の傾向を把握した。更にTEA理論（サトウ，2012）に基づいて、就職時から学習支援員継続までの時間軸で起こる抑制要因や促進要因を含んだ図を作成し分岐点や径路について時系

列で可視化した。

2. 4 考察

質的データを元とした構造図や関連語、TEM図から心理的態度や自己選択の径路が推察された。また、関わりにおける心理資源の検討を通し、元教師らの思考や価値、信念について仮説が生成された。

第3章 研究2:全国の学習支援員(元教員)への Web 調査

3. 1 目的

1章で得られた結果を質問項目に含めて、全国の重症者の生涯学習支援を行う元教員に対して Web 調査を実施する。それによって支援する者の心理的側面(心理的態度や信念、価値等)を更に明らかにし追究する。

3. 2 方法

重度障害者・生涯学習ネットワークのメーリングリスト代表者に依頼して転送してもらい、同意を得た学習支援員(元教員)に Web 調査を行った。対象者は退職後も生涯学習支援を続けている者とし、2024年11月前半2週間で実施した。リッカート法による独自の調査項目、自由記述2問、既存の2尺度を使用し、66項目への調査回答を求め、統計的分析を行った。自由記述はKH Coderを使用し分析した。

3. 3 結果と考察

24名の質問回答は分布に偏りがあり、 χ^2 検定を行い回答頻度について検討した。結果として、インタビューで得られた特徴的な文言を質問に使用した項目の回答には「あてはまる」という回答割合が有意に高く、インタビュー協力者との等質性が確認された。また、既存尺度「生きがい意識尺度」(今井, 2012)と2項目自尊感情尺度も使用して分析を行った。自由記述の分析では、関わりにおける心理的資源について類似した特徴が確認された。

第4章 総合考察

本研究を通し、重症者への関わりの心理的態度と生涯発達における中高年期であることは注目すべき点であった。そこで、(1)「関わり続けている動機づけ要因」、(2)「活動の選択と継続における役割変化」、(3)「応答表出の捉えにくい重症者との関わりにおける心理的資源」(4)「対象者について」の4つの項目から考察を行った。心理的特性として、対象者への肯定的見方やポジティブな信念、満足感、意味づけの安定、自己成長感等、幾つかの特徴的な信念が確認され、また、これらが継続における動機づけともなっていると考えられた。更なる課題として、快感情を捉える感度の高低と継続要因、信念に至るまでの変動の段階と継続との関係等を検証していく必要があると考えられる。

本研究の意義として、最新の先行研究(小池, 2019)にあるように、他者が関わることの意味合いが更に明確になることや、長期的な実践の蓄積が重症者の健康や発達を促進する可能性が実証されれば、活動への社会的評価が得られると考えられる。それは支援する者にとって一層のやりがいや自信を高めていくものとなる。本研究が今後の人材育成の一助となればと考える。

しかしながら、本研究の少数のデータから結論するには限界があり、他の解釈の可能性を残している。今後、成人期重症者や支援者への縦断的研究がさらに進むことが望まれる。

引用文献

- 阿部 智美(2013). 患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解説, 問題解決, 感情」との関連 日本看護研究学会雑誌, 36(1), 149-156.
- 荒川 歩・安田 裕子・サトウ タツヤ(2012). 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- 帯木 蓬生(2017). ネガティブ・ケイパビリティ答えのない事態に耐える値から 朝日新聞出版
- 樋口 耕一(2021). 社会調査のための計量テキスト分析; 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版
- 井川 純一・徳岡 大・中西 大輔(2019). 対人援助職のストレス反応と主観的報酬の関係 健康科学研究, 3 (2), 61-74.
- 飯野 順子・山本 景子・梅垣 富美(2020). 切れ目のない学ぶ喜び&生命輝く生涯学習を! ——訪問カレッジ・秋津樺大学の取組—— 日本重症心身障害学会誌, 45, 195-100.
- 今井 忠則・長田 久雄・西村 芳貢(2012). 生きがい意識尺度(Ikigai-9)の信頼性と妥当性の検討 日本公衛誌, 59(7), 433-439.
- 市江 和子(2008). 重症心身障害児施設に勤務する看護師の障害児・者の反応を理解し意志疎通が可能となるプロセス, 日本看護研究学会雑誌, 31, (1), 83-90.
- 重度・生涯学習ネットワーク(2024). 「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関する実践研究報告書.
- 川住 隆一(2003). 超重症児の生命活動の充実と教育的対応. 障害者問題研究, 31, 11-20.
- 小塩 真司・岡田 涼・茂垣 まどか・並川 努・脇田 貴文(2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響——Rosenbergの自尊感情尺度日本語版のメタ分析—— 教育心理学研究, 62(4), 273-282.
- 増田 真也(1998). 曖昧さに対する体性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要, 47, 151-163.
- 松田 直(2002). 重度・重複障害児に関する教育実践研究の現状と課題 特殊教育学研究, 40 (3), 341-347.
- 箕浦 有希久, 成田 健一(2013). 2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討 感情心理学研究, 21(1), 37-45.
- 宮地 弘一郎(2023). 重症心身障害児(者)への日常的な短時間会話効果の心拍による検討 生理心理学と精神生理学, 41(2), 141-153.
- 中山 慎吾(2019). 障害者施設職員の肯定的仕事観に関する研究——自由回答に基づく分析——鹿児島国際大学社会学部論集, 38, (1), 42-54.
- 中澤 恵江(2001). 盲ろう児のコミュニケーション方法——分類と体系化の試み 国立特殊教育総合研究所紀要, 28, 43-55.
- 野崎 義和・川住隆一(2012). 「超重症児」該当児童生徒の指導において特別支援学校教師が抱える困難さとその背景 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60(2), 225-240.
- 岡澤 慎一(2012)超重症児への教育的対応に関する研究動向 特殊教育学研究, 50.(2), 205-214.
- 奥西 允(2022). 重度知的障害者との支援関係に関する一考察 東洋大学大学院紀要, 58, 289-306.
- 大島 一良(1971). 重症心身障害の基本問題 講習衛生, 35(11), 648-655.
- 田中 稔哉(2023). キャリアコンサルティングにおける人間観とネガティブ・ケイパビリティ 発揮一熟達者へのインタビューに基づく検討— 社会構想研究, 5(1), 15-27.
- 若本 純子(2007). 中高年期の自己評価における発達の特徴——自尊感情との関連、および領域間の関連に注目して——パーソナリティ研究 16(1), 1-12.
- 山浦 晴男(2012). 質的統合法入門: 考え方と手順, 医学書院.
- 安田 裕子・滑田 明暢・福田 茉莉・サトウ タツヤ(2015). ワードマップ TEA理論編, 新曜社